

宗教心理学研究会ニュースレター

第27号 2018.3.15

宗教心理学研究会

Society for the study of psychology of religion

目次

第14回研究発表会報告	-----	報告 河村 謙	1
「超高齢社会における宗教性／スピリチュアリティ研究」は進展しているか？	-----	大橋 明	7
各研究領域におけるスピリチュアリティの個別性と類似性をいかに考えるか	-----	中里和弘	10
公募シンポジウム(宗教心理学研究の展開14)に参加して			
－実証的宗教心理学研究に期待すること－	-----	末田啓二	11
宗教心理学的研究の展開(14)に参加して	-----	木村真利子	12
「死の顕現性」がつなぐ高齢者研究と被害者研究	-----	白岩祐子	13
高齢者の宗教性・スピリチュアリティ研究への期待	-----	辻本 耐	15
日心シンポジウム参加記－「生(→)老病死」の宗教性／スピリチュアリティ研究－	-----	村上祐介	16
事務局からのお知らせ	-----		18

第14回研究発表会報告

日本心理学会第81回大会公募シンポジウム：宗教心理学的研究の展開(14)

—超高齢社会における宗教性／スピリチュアリティ—

報告 河村 謙(尚絅大学短期大学部)

2017年9月21日(木)16:30～18:10、久留米シティプラザで開かれた日本心理学会第81回大会の公募シンポジウムにおいて、第14回研究発表会「宗教心理学的研究の展開(14)—超高齢社会における宗教性／スピリチュアリティ—」が行われました。

まず、話題提供に先立って企画及び司会の松島公望先生が本企画の趣旨についての話がありました。超高齢社会となった今日、終末期医療や終末期ケア、看取り、臨床宗教師、老年的超越、スピリチュアルケア、スピリチュアルペイン、死への不安・態度といった言葉が注目されています。

一方で、昔は盛んに言われていたスピリチュアルという言葉を以前と比べて見聞きする機会が無くなつたという医療の現場の意見や、学会でも宗教性やスピリチュアリティに関する研究を見かけないことを指摘されました。これらの状況を踏まえて、果たして日本では宗教性やスピリチュアリティがどの程度の広がりをみせているのかについて広く考える機会として今回の企画を立ち上げたことを説明されました。

最初の話題提供として、大橋明先生が総論という形で「日本における老年学、医療、看護、介護領域でのスピリチュアリティ研究の状況と今後

の展望」について報告されました。

まず、「高齢」または「老年」を含み、かつ①「宗教性」、②「スピリチュアリティ」または「スピリチュアル」を含む実証研究論文及び学会発表検索を行い、検出された論文数・学会発表数の年次推移及び発表形式の年次変化を紹介しました。論文数・学会発表数は 1999 年より年々増加傾向にあり、近年においても微増または維持という状態であるとのことでした。発表形式に関して、解説・特集が 2004 年の 56.8 % (21 本) をピークに減少しており、近年は実証研究論文と同程度の割合となっている。実証研究論文は 2009 年の 40.0 % (16 本) をピークに近年の割合は 30 % 程度に減少している。ただし、本数は 10 ~ 16 本を維持している。事例等の学会報告は、その割合が非常に増加傾向にあり、2011 年の 56.8 % (25 本)、2012 年の 51.0 % (26 本)あたりをピークとし近年 20 本程度を維持しているといった状態であるとのことでした。また、これら実証的研究の傾向や内容についても紹介されました。事例・症例報告が 50 % 近くであるが、近年は直接や質問紙によるスピリチュアリティの調査も行われている。内容としては、末期患者、特にがん患者の研究が多くを占めているが、最近は一般高齢者やがん以外の病気に罹患した高齢者、死別してひとりになった配偶者、認知症高齢者や要介護高齢者を対象とした研究も増えている。末期患者や在宅高齢者、配偶者遺族、認知症高齢者のスピリチュアリティの「内容・意味」だけではなく、「どのような支援が有効か」についての研究も増大している。尺度を用いてスピリチュアリティと関連した要因を検討するといった量的研究も増えてきている、とのことでした。スピリチュアリティの研究量は維持または増加しており、その内容も多岐に広がっていることから、この分野の研究は着実に発展していることを感じました。

その一方で、「スピリチュアリティ」または「スピリチュアル」で検索された論文数・学会発表数と比べ「宗教性」で検索された論文数・学会発表数はかなり少ないという結果にも言及されました。「宗教性」という言葉があまり認知されていないのではという視点から、「宗教性を匂わすかもしれない

言葉」を『宗教を心理学する』(松島・川島・西脇、2016)からピックアップし実証的研究の検索を改めて行ったところ、「宗教性」の論文数・学会発表数が少し増加していたとのことでした。また、研究内容としては、特殊な宗教行事を受け継いでいる地域の住民を対象とした研究が比較的多く、宗教者や信者の研究も散見されたとのことでした。また、一般高齢者の宗教性(宗教意識・宗教行動)や宗教性と他の要因との関連についても扱われているとのことでした。先生の報告より、宗教性に関する研究もスピリチュアリティの研究と同様に広がり、発展しているのを感じました。しかし、スピリチュアリティ関連の論文数・学会発表数と比較し、宗教性関連の論文数・学会発表数は圧倒的に少ないです。これは宗教性という言葉の認知され具合という話もありましたが、WHO が設定したスピリチュアリティの領域に「信仰」も含まれているように、宗教意識を包括してスピリチュアリティとして扱っている研究も多いためではないかと感じました。宗教性としてみていくためにも宗教行動の側面も重視する必要があると思います。今後は、宗教意識とともに日常生活の中にもあるような宗教行動を包括的にみて、宗教性へと集約して検討する研究の蓄積も重要であると感じました。

また、大橋先生の丹念な研究への姿勢に深く感銘を受けました。「宗教性を匂わすかもしれない言葉」のピックアップ及びそれらの論文検索には非常に大きな労力がかかったと思います。そのような作業を丹念にこなす真摯な姿勢の大切さを改めて感じ、身が引き締まる思いでした。

続いての話題提供からは各論という形となり、それぞれの具体的テーマに沿った報告となりました。

まず、日常場面の視点から、本報告書を書いている河村が「高齢者施設における利用者のスピリチュアルケア・宗教的な関わりの現状と課題」について報告いたしました。

超高齢社会の日本において、今後要介護高齢者や高齢者施設を利用する割合が増加することが予想されます。また、介護保険制度の改定(2006)や介護報酬の改定(2009)、高齢者施設で

亡くなる数の増加傾向に伴い、高齢者施設における看取りや終末期ケアの対応が期待されているといえます。すなわち、高齢者施設では、日常場面(介護場面)と終末期場面の両方の QOL が重要であると考えられます。そこで、高齢者施設における QOL に関する宗教やスピリチュアリティに関する先行研究、及び施設におけるスピリチュアルペインの特徴を紹介しました。特徴としては、施設入所により身内や知人との関係性が弱くなったり途切れたりしてスピリチュアリティが低下すること、慢性疾患や身体・精神障害、機能喪失、常時介護といったことから、人としての価値や人生の意味を問い合わせ直すといったように、意味喪失や実在的空虚感といったスピリチュアルペインを抱えることがあげられます。様々な先行研究からは、施設における宗教の信仰や宗教行動が QOL の向上やスピリチュアリティに良い影響を与えることが報告されています。一方で課題として、施設において宗教的な関わりを行っているがその宗教と職員の宗教観(死生観)が不一致であること、利用者の生活歴(宗教)を把握があまりなされていないまたは困難であること、宗教家との連携があまりなされていない、といったことも指摘されていました。以上を踏まえて、高齢者施設における宗教やスピリチュアリティに関する今後の展望として、①複数の施設からどのような宗教的な関わりを行っているかを把握、②宗教的な関わりを行う上での工夫点や配慮点の整理、③宗教的な関わりがどのような効果や影響を与えるか、④関わる上での利用者や職員の宗教への思いや信仰心との関連性、⑤宗教家との連携、⑥遺族へのケアとしての宗教的な関わりのあり方や有用性、を質的・量的に検討することが考えられます。

そこで、上記①～③に関する調査研究を行いましたので、その結果報告も行いました。対象者は宗教法人(浄土真宗の寺院)が経営母体である高齢者施設 5 施設の介護職員 9 名と宗教法人が経営母体ではない高齢者施設 2 施設の介護職員 3 名で、手続きは半構造化面接によるインタビュー調査でした。質問内容は、「どのような宗教的な関わりを行っているか」「その関わりの工

夫点・配慮点や問題点・課題点」「関わりを通して利用者や職員にどのような影響や効果があったか」を尋ねました。結果、行っている宗教的な関わりは、仏壇や仏間の開放や定期的な法話会、お盆等の宗教行事や利用者のお通夜・葬儀等があげられました。工夫点・配慮点は、利用者個別への対応と施設での対応に大きく分けられることが示されました。問題点・課題点は、利用者・職員・施設の面で限界性があることが示されました。宗教的な関わりを通しての利用者の様子は、日常場面と死に関する場面ともにポジティブな影響があったことと自身の死と死別の両方にそれらが作用することが示されました。宗教的な関わりを通しての職員の変化としては、宗教の重要性を感じるようになり、利用者にとっての宗教の大切さを感じるようになったり介護の質が高まつたりしたことが示されました。これらの結果より、高齢者施設における宗教的な関わりは日常場面と死に関する場面ともにポジティブに作用するとともに利用者だけでなく職員にも影響する可能性に注目しました。ケアの質は職員の死生観や宗教観に影響されると先行研究でもいわれており、ケア実践の面からも職員の宗教観への影響という側面から検討することも重要であると感じました。

続いて、終末期ケアの現場の視点から、中里和弘先生が「終末期がん患者の「スピリチュアルペインのアセスメントとケア」の現状と課題」というテーマで報告されました。医療と看護の分野では、スピリチュアルの概念について全人的苦痛の概念から共通認識がなされている一方、スピリチュアル領域と身体的・心理的・社会的領域との位置づけに関しては相違があることを示されました。スピリチュアル領域について、医療の分野では身体的・心理的・社会的領域とともに全人的苦痛の一因子であるとしていますが、看護の分野では身体的・心理的・社会的領域それぞれに影響を及ぼしあう(影響を与える、受ける)としているとのことでした。スピリチュアルペインの定義・構造については、対人援助論を背景に人間的存在について規定している村田(2003)のモデルが広く受け入れられていることを報告しました。このモデルは、人間存在は時間性、関係性、自立性の

3つからなると捉えており、スピリチュアルペインを「自己の存在と意味の消滅から生じる苦痛」と定義しています。したがって、具体的なスピリチュアルペインを有する終末期がん患者が自己の死が接近することにより「将来の喪失」「他者との関係の喪失」「自律の喪失」からあらわれる生の無意味、無価値、虚無、孤独があげられるとしています。この理論はケア実践場面との整合性が認められていることから、個々のスピリチュアルペインの違いを内包する全体性を支える視点を持っており、どのようにアセスメントしてケア実践に活かすかといったアセスメントの理論的枠組みとなっているところに価値があるとのことでした。

スピリチュアルペインへのアセスメントとケア実践として、SpiPas(Spiritual pain assessment sheet)を紹介されました。これは田村他(2012)により開発された、スピリチュアルペインを俯瞰的にアセスメントし、それに即したケア実践を行うためのツールであり、面接者を看護師に想定しての妥当性と実施可能性は検証されています。SpiPas の優れている点として、①スピリチュアルペインを村田の理論に基づいて時間性、関係性、自立性の3次元に分割し、コア概念の整理を行っており、内容が構造化されている点、②日常的な診療やケアの中で活用(アセスメント⇒ケア計画⇒実践⇒評価修正)することを想定している点、③実用性を支える具体的なケア実践を提案している点をあげていました。すなわち、SpiPas はスピリチュアルという抽象度の高い事柄を実践場面での応用を広げたという価値があるとお話をされました。

スピリチュアルペインに対する心理療法として、ディグニティセラピーと短期回想法(ショートライフレビュー)について紹介されました。ディグニティセラピーは、9つの定式化した質問に基づいて面接を行い、その内容を文章(生成継承性文書)にして患者に届けるというもので、海外では有用性が評価されているそうです。ただし、国内の終末期がん患者を対象にディグニティセラピーの実施可能性を検討した研究では患者の拒否率は86%となっており、理由としては①日本では死を意識しないことを重視する、②死を否定すること

でのコーピングとして機能している、③以心伝心の価値観、④死の準備に重きを置かない、ということがあげられています。そのため、面談の中で自分の死や死後について自ら言語化し、家族に何か遺したいという意志が強い患者が対象になりやすいといったように、対象者を選択する必要性が指摘されているとのことです。短期回想法(ショートライフレビュー)は一般的には高齢者を対象に実施されている心理療法で、形式としてはディグニティセラピーと似ていますが、ディグニティセラピーは自分の死を前提に他者に遺したいことを明確化する項目がコアであるのに対し、対象者のこれまでの人生に重きを置いている点が異なるそうです。患者が面接者とともに達成できたことや良かったことを確認していくことによって人生の意味づけを改めて行い、意味感や目標感を高めるというものになっています。短期回想法によりスピリチュアル機能が有意に上昇し、不安や抑うつも有意に減少したという報告もあり、短期回想法はスピリチュアルケアとして有効であると結論づけられているとのことでした。

また、介入研究で課題の一つにあげられる介入効果の評価に関して、世界の複数の国々で翻訳されているがん患者の QOL を評価する代表的な尺度として FACT-SP(Functional Assessment of Cancer Therapy-spiritual scale)という尺度を紹介されました。この尺度はスピリチュアルな領域を計12項目で評価するもので、「信念」と「生きる意味／平穏」の2因子からなり、日本でも信頼性と妥当性が検証されているそうです。

まとめると、スピリチュアル領域に関する介入法と評価に関する日本の現状は、①実施可能性の検討段階である、②対象者の選定・介入の仕方には文化差を考慮する必要性がある、③介入効果の評価の不足・模索中、とのことでした。以上を踏まえて今後の展望としては、①「重篤な病気という文脈を前提」「病気の特徴としてコミュニケーション能力が最期まで維持される」がん患者と平穏な日常性が保たれている状況下や加齢に伴う老いや死を自覚した場合のスピリチュアルの異同の検討、②ケア実践の報告の蓄積の増加及

びケアを受ける本人や家族の視点からの介入効果の検証、③海外の介入法が有効にはたらく場合の機序や効果、困難な場合のケースの背景要因の検討とともに、専門性を残しつつ実用性の高い介入法の検討、④地域包括ケアシステムを視野に入れた、在宅療養におけるスピリチュアルペインの実態の検討、をあげていました。

医療や看護の現場・実践の面では介入の方法や評価、効果の検討が非常に重要ですが、先の私の報告にもありましたように症例報告や実践報告は多くなされているものの、量的手法を用いての介入効果の評価についてはあまりなされていません。一方で、介入効果の評価方法がある程度確立すればスピリチュアル研究も発展、蓄積し、医療や看護、介護の現場にも多大に還元できるとも思っています。現場における介入方法や効果の評価は、現場や社会の要請に応える重要なテーマだと感じました。

最後に、川島大輔先生が死にゆく人や死の不安に焦点を当て、「高齢期における死と宗教」というテーマで報告されました。

先行研究を通して、高齢者は若者と比べるとあまり死を恐れていないということがよく言われる一方、高齢者間では年齢は関係しない(高齢期になつた後に不安が下がるとはいえないことや死にゆく過程での痛みについての不安・恐怖はむしろ高いことも言われています。このように死の不安に関しての内実は様々であるが、高齢者がなぜ死を恐れないかについては、宗教性やスピリチュアリティが関連しているためと指摘されました。実際、川島先生は自身のインタビュー調査を通して、最後は先祖や仏、神様を信じれば何とかなる、守ってもらえるといった思いから死が怖くないといった語りがよく聞かれるとのことでした。

このように今までの研究では死の不安、死の受容に関して、宗教性があれば死の不安が下がる、死を受け入れられる、したがってそれを目指すといったものが多かったのですが、果たして死の不安が低いことは本当にいいことなのかという疑問を川島先生は提示されました。先生は自身のインタビュー調査で、ある1名の女性高齢者を対象にライフストーリーの中での死別経験や死に

についての語りを聞き、宗教等の関わりについて尋ねたそうです。その中で、ある転機を境に死と宗教の結びつきが変わったということが語られました。具体的には、信仰している宗教上の死後の世界のストーリーは変わらないが、死の意味づけが死後世界への期待や現実からの逃避と結びつけられているもの(転機前、今がつらいと感じている)が、生きるための指針や心の拠り所と結びつけられているもの(転機後、日々充実している)に変わったとのことでした。これを踏まえ、宗教が提供する死後世界のストーリーを自分の中の死や生にいかに組み込むかで話が変わるため、死の不安を低くするために死後の世界のストーリーの語りが大切とはいえないのではないか、と指摘されました。私自身、先生のご指摘には目から鱗が落ちるような思いとなりました。死後の世界のストーリーを手段とするのではなく、そのストーリーをどのように捉えるかに着目する必要性を痛感いたしました。

また、高齢者の語りの中でよく表出される「ぼっくり逝きたい」という心性について、死の不安ではなく誰かの迷惑にはなりたくない、負担になりたくないといった「自分の尊厳」が侵されることへの抵抗感、周囲の人や残された絆を維持のために負担感をかけたくないという思い背後にあるのではないかと指摘されました。負担感に関して、自分が周囲の負担になっていると思うと、本当は自宅での臨終を希望しているのにそれを家族に伝えるのを遠慮する、生命維持治療などの積極的なケアを望まない、安楽死や自殺を考えようになると先行研究で指摘がなされています。ここで自殺ということに着目すると、自殺の対人関係理論における自殺の3つの構成要素(所属感の減弱、負担感の知覚、身につけた自殺の潜在能力)のうち、身につけた自殺の潜在能力の尺度には死の不安がないとのことです。この点から見ても、死の不安がないということは実は自殺のリスクにもなっている、このことが様々な研究で検討されてきているということを紹介されました。ただ、所属感が弱まり、周囲への負担感が高まった時に自殺念慮が高まり、それが企図へ結びついた時に死の不安のなさからの自殺に関わって

くるとのことでした。したがって、死の不安がない、低いということよりも「生の充実をはかる」ことが重要であり、そのためには居場所をつくりたり、尊厳を保つつつ社会とのつながりをどのように広げたりしながら人生の最期を迎えることができるのかを検討していく必要性があることを提示されました。その際、宗教の役割としては死後の世界のストーリーの提供だけではなく「再びつなぐ」部分もあるとし、宗教的信条から自らのいのち、他者のいのちを大切にしようすることを養うとともに儀礼を通しての居場所の提供は社会的つながりを拡張していくことが必要であるとお話しされました。先生のお話から、宗教性(宗教意識や宗教行動)を通じた宗教の役割を改めて考える視座をいただいたと思います。死後のストーリーに関する話もそうですが、つながりを作るための宗教、生の充実を図るための宗教という視点は、医療や看護・介護の現場だけではなく日常場面にも展開し、よりよい社会を考えていく上で重要なと感じました。

以上の話題提供を踏まえ、指定討論として末田啓二先生がお話をされました。

まず、心理学研究として宗教や宗教性、スピリチュアリティ(靈性)を取り上げることの意義を総括しました。日本においては、宗教はキリスト教や仏教といった創唱宗教をイメージされやすく、歴史的背景からもネガティブなイメージがあります。また、実証性やエビデンスが非常に重視される心理学の分野からみても、指標や尺度の合理性・妥当性の点、定義や概念の一般化、普遍化、統一化の点、研究手法が確立されていない点から宗教性やスピリチュアリティは忌避される傾向にあります。しかし、医療・看護・介護・福祉・教育の分野では宗教やスピリチュアリティがいかに重要な役割を持つかが再認識されており、特に高齢者を対象とした研究や実践では避けて通れない課題です。また、宗教性やスピリチュアリティは人間固有の心理特性として考えられ、心理学の研究対象になります。このため、宗教性やスピリチュアリティはもっと心理学の分野で取り上げられる必要があるということを提示されました。一方で、日本においてはキリスト教的な考えに基づ

いた枠組みではなく日本独自の枠組みで構築していく必要があることも指摘されました。

続いて、資料において話題提供者へのコメントを提示されました。大橋先生(「日本における老年学、医療、看護、介護領域でのスピリチュアリティ研究の状況と今後の展望」)からは、文献検索による文献研究、レビューの重要性が示唆されているとともに、特に高齢者にとって重要な役割を果たしている根拠を多くの視点から検討する必要性も示唆されているとのことでした。一方、宗教性とスピリチュアリティは全く異なる概念かそれとも関連すると考えるか、なぜ研究量が宗教性よりスピリチュアリティが多いのか、といったところも今後の検討課題としてあげられていました。私、河村(「高齢者施設における利用者のスピリチュアルケア・宗教的な関わりの現状と課題」)からは、介護職員のスピリチュアリティや信仰の重要性の点から、宗教やスピリチュアリティを踏まえたケアは単に介護技術だけの問題ではなく介護職員の内面にも関わる問題であり、総じてスピリチュアルケアやスピリチュアルペインの軽減に反映されるとのことでした。一方、スピリチュアルペインの介入効果研究として、今後どのような指標を用いるか、どのような影響要因を想定するかが検討課題としてあげられました。中里先生(「終末期がん患者のスピリチュアルペインのアセスメントとケア」の現状と課題)からは、介入効果研究の代表例は事前テスト・事後テスト統制群法であり、紹介された統制群を用いての実践研究スタイルは臨床現場でのアプローチとして極めて実証的であるとのことでした。一方で、被験者によっては負担が重過ぎる場合もあるという課題があげられました。川島先生(「高齢期における死と宗教」)からは、事例研究と実証的調査研究は双方に行き来するものであり、事例研究から一般化を目的とする調査研究へ発展する一方、調査研究の知見から事例研究へ進む場合もあるとのことでした。一方、死の不安が老年期に低下する現象をどのように解釈するか、適応様式の視点から解釈できないか、ということもお話をされました。

次に、今後の方向性、展望性について言及されました。社会通念として宗教が狭義的に捉えら

れていること、しかし日本では自然宗教(原始宗教や神道、山岳信仰など)も広く宗教に入ると考えられていること、スピリチュアリティも含めることから、「宗教心理学」の呼称を「宗教性心理学」に変えるのはどうかということを提示されました。また、研究対象についても、既成の宗教や特定集団の心理特性、集団内影響作用だけではなく、日常生活に生じる無意識的宗教的行為や思考、心理現象(例えばアニミズム心性や占い・おみくじ、老年的超越など)にもっと目を向ける必要性を指摘されました。

最後に、日本における実証的宗教心理学の今後として、ユダヤ・キリスト教の枠組みから脱却し、宗教を継続的に信じること(宗教的信念)に限らず、宗教にまつわる事柄に対して「感じ体験すること(宗教的感情)」「行うこと(宗教的行為)」にもっと目を向けるべきとの松島(2016)の指摘が紹介されました。これを踏まえ今後の課題例として、情操教育(生命や自然への畏敬など)への基礎資料の提供、他分野と擦り合わせた概念の整

理、culture-free の指標・尺度による国際比較研究の推進、学際的研究(他分野とのコラボレーション)の促進、高齢者は個人差が顕著で統計に乗りにくいため被験者のサンプリングを慎重に行うこと、があげられました。

本シンポジウムを通して、宗教やスピリチュアリティの研究が広がるとともにその対象や視点も多角的になってきていることを感じました。私自身、宗教に関する研究を行う際、積極的に受け入れ支持してくれる人たちがいる反面、宗教の方々から宗教はケアではない、利用するなど否定的に言われたこともあります。宗教家にとってもそうでない人にとっても、宗教やスピリチュアリティの捉え方は様々で信念だけでなくその評価も大きく異なると思います。しかし、今後、社会的にも需要が増すテーマであり、研究やケア実践もさらなる発展が望されます。

最後になりますが、本シンポジウムを企画いただいた松島公望先生に厚くお礼申し上げます。

「超高齢社会における宗教性／スピリチュアリティ研究」は進展しているか？

大橋 明(中部学院大学:非会員)

1. 話題提供の概要

老年学、医療、看護、介護の領域において宗教性やスピリチュアリティの実証的研究が進められているのかを報告することが私に与えられた課題でした。これまでに高橋・井出・Riboudou・内ヶ島(2004)によって文献の整理は行われていますが、高齢者に特化したものではありません。そこで今回は検索語を、「高齢」または「老年」を含み、かつ①「宗教性」、②「スピリチュアリティ」または「スピリチュアル」としました。その上で国立情報学研究所 Cinii、医学中央雑誌医中誌 web、メディカルオンライン、社会老年学文献データベース DiaL を用い、1999 年から 2016 年の研究を検索しました。

検出された論文数・大会報告数は 1999 年や 2000 年で僅か 1 ~ 2 本であったのが、年々増

加していく、2008 年以降は多少の増減はあるにせよ、毎年 40 本以上の報告がなされていることがわかりました。そのうち実証的研究の大会報告は、2011 年以降で 1 年間に発表される研究全体の 4 ~ 5 割、実証的研究の論文は 2005 年以降において 2 ~ 4 割を占めました。

実証的研究の内容について概観しますと、事例・症例報告、また末期患者を対象とした研究が多くを占めました。この理由については、検索データベースに『死の臨床』『ホスピスケアと在宅ケア』『日本緩和医療学会』での大会報告が含まれていることが大きいと推察されますが、それだけこれらの領域での研究がなされていると言えましょう。

研究対象も末期患者のみならず、在宅高齢者、配偶者を喪失した遺族、認知症高齢者と広

がりを見せつつありました。サマリーシートの活用や心理療法などによる支援の効果、尺度を作成しどのような要因が関連しているかといった研究もなされています。

ところで、ここまで述べてきたことのほとんどは「スピリチュアリティ」「スピリチュアル」で検索し抽出された研究に関することです。「宗教性」をキーワードにしたところ、毎年 0 ~ 3 本の研究しか抽出できませんでした。しかし、「宗教性」という語を用いない研究がなされている可能性を考慮し、『宗教を心理学する』(松島・川島・西脇、2016)に記載された宗教性にまつわると考えられる語をピックアップし、それを「スピリチュアリティ」「スピリチュアル」と同様データベースで抽出するという作業を行いました(時間がなく Cinii のみで断念)。その結果、「宗教性」の論文や大会報告が年々微増していること、特に 2009 年や 2014 年は合計 9 件ずつと比較的多いことが見出されました。内容を概観すると、祭祀や葬送など特殊な行事を現在も受け継いでいる地域の住民を対象とした研究、ある宗教組織に所属する高齢宗教者や高齢信者を対象とした研究、特別な地域に限定せず宗教にまつわる意識や行動そのものを扱う研究、宗教性に関連する要因に関する研究に大別できそうです。

以上のことから、高齢者を対象とした宗教性／スピリチュアリティ研究は進展しているのではないかということが今回の結論です。

2. 指定討論への返答

末田啓二先生からはたくさんのコメントをいただきました。不勉強ゆえに、思いだけで走る雑な論となりますことをご容赦ください。

まず宗教性とスピリチュアリティの構成概念の同異についてです。宗教を指す語 religion は「再びつなぐ」の意とされています。その再びつなぐもの・システム(島薦、2012)がキリスト教、イスラム教であったり仏教であったりするでしょうし、その対象は特別なひとり(父なる神、預言者、釈迦など)であると考えます。従って、宗教性とはこれらシステムや特別な対象に関する意識や行動を指すと思われます。無宗教とよく言われる日本人の

場合、初詣、日の出の参拝、鎮守祭などのお祭り、墓参りなどが「つなぐ」システムで、その土地の神や太陽という自然、祖先が対象となりますが、これらにまつわる意識や行動も宗教性と言えましょう。

一方、人は失恋や死別、病などさまざまな事象の体験を通して、他者や神仏、過去・未来への疑いや断絶感を抱き、生きる意味を見失うことがあります。そんな折に人は神仏にすがって祈り、大いなるものに守られた感覚・安寧がもたらされるわけですが、この点からも宗教性とスピリチュアリティはつながりがあると考えます。

ただ、絶望する中で、ふと目にした足元の小さな花に自分の命と重ね合わせて人生の意味をはっと再認識したりすることもあるでしょう。絶望の中でそれでも淡々と動き続ける時計の秒針を見て「生きていてもよい」とふと感じたりすることもあるでしょう。「見てくれている人がいる」「この先に待ってくれている人がいる」となぜか感じ、生きるよすがになることもあります。私たちにそういう思いを与えてくれたのは「大きなもの」かもしれません、ふと隣にいる他者であったりもすると思います。またその端緒が何であれ、その結果として自己存在に関わるさまざまな観念を抱くことあるいはその内容がスピリチュアリティのように思われます。

つまり、スピリチュアリティやスピリチュアル(ペイン)とは、宗教性あるいはその他の認識を通して、「超越的なものや見えない世界とのつながりを感じること(感じられないこと)」のみならず、「生きる意味を感じること(感じられないこと)」「他を愛すること(愛せないこと)」などといった観念を抱くこと、あるいはその内容全体を指す、非常に幅の広い構成概念であり、「人が生きる、生きる」ということに極めて強く関係するもののように思われます。ということで、「スピリチュアリティ」と先の「宗教性」とは少々異なるかもしれません。

ただし、こうなってくると、スピリチュアリティは「希望」「愛他」「喪の作業」「老年的超越」などという分割した構成概念で考えることもできます。スピリチュアリティはこれらを包含する概念だと言ってしまえば簡単ですが、果たしてそれでいいの

かという疑問も生じます。

次にスピリチュアリティの方が宗教性より研究量が多いのはなぜかということについてですが、スピリチュアリティという概念を比較的早く取り入れた医療系雑誌を検索するデータベースを中心として検索したことがまず前提として挙げられます。また「宗教性」という語は、今回検索した研究領域では日本においてほとんど使用されていないことも大きいように思います。例えば Psychology of Religion and Spirituality や Journal of Religion and Spirituality of Aging の両雑誌を概観しますと、キーワードとして spirituality や religion という語が多くの論文に入っています。先述したように日本の心理学や看護学などの雑誌では、このようなことはありません(末田先生のご指摘通り、宗教学や民俗学関連の雑誌では「宗教性」が多数用いられています)。あくまでも推測ですが、当該研究領域においては、祈りや日の出を拝むといった自然宗教にまつわる意識や行動を「宗教性」という語で包括的に表現することに対する共通理解が未だなされていないのではないかでしょうか。また、よく指摘される「宗教への忌避感」がある、といったことも挙げられましょう。さらに先述した宗教性とスピリチュアリティの意味するところの違いも影響しているかもしれません。

3. シンポジウムおよびこのテーマに関する感想

司会を務められた松島先生、報告者となられた河村先生、中里先生、川島先生が高齢者を対象としたスピリチュアリティや宗教性の研究を堅実に行っておられること、また末田先生のように温かでかつ厳しいご指摘をいただける方がいらっしゃ

しゃること、そして多くの聴衆がおられ辛辣なご意見も出されたことは、この領域がますます発展していくことの証左であると思います。私もそれなりにこの領域に关心がありますが、非常に貴重な機会となりました。

末田先生からは『宗教性やスピリチュアリティが、特に高齢者(高齢社会、超高齢社会)にとって重要な役割を果たしている根拠を、「positive 心理学」「健康心理学」など多くの視点から検討する必要性が示唆されている』というご指摘をいただきました。「多くの視点から」ということには諸手を挙げて賛成です。ただ、例に出された positive 心理学が心理学の世界で売れっ子になった(そして批判も出た)背景・展開とスピリチュアリティブームの隆盛とは、長短重なる部分もあるように感じますので、一歩ずつ進める地道さも必要とも思っています。

「スピリチュアリティ」は人間にとって極めて重要な役割を果たすものですが、どうしても曖昧模糊とした感覚が拭いきれず、またそれゆえに懸かれもします。ただし心理学という学問で捉える以上、いかに共通理解のものとして表現するかが問われるような気がします。井出(2008)がスピリチュアリティとは何かの統一的な議論がなされないままであるがゆえに混乱をきたしていることを指摘し、その言が Takahashi(2016)でも続いていることは、この問題の難しさと「伸び代」の豊かさを表してくれているのではないでしょうか。

「スピリチュアリティ」に対するわからなさが心の中に澱として依然と留まっていますが、私はこの感覚を今後も大事にしていきたいと思っています。

各研究領域におけるスピリチュアリティの個別性と類似性をいかに考えるか

中里和弘(東京都健康医療センター研究所)

今回のシンポジウムでは、私は「終末期がん患者のスピリチュアルペイン」に焦点を当てた話題提供をしました。シンポジウムの企画背景の中で、「宗教性やスピリチュアリティ」という言葉が近年、見聞されない傾向があるのではないかという問い合わせもありましたが、私は、医療や看護の分野におけるスピリチュアリティに関する研究や知見は着実に前進しているという思いがありました。そして医療や看護の実践者向けの書籍、特に終末期ケア関連の内容を含んだ書籍では、スピリチュアル領域のケアに関して、患者がどのような言葉を語り、現場の医療職が患者のスピリチュアルペインをどのように理解したら良いかを概説したものも増えてきている印象をもっています。そこで今回のシンポジウムでは、関連する先行研究のレビューを通じた現状報告と展望について話題提供をすることで、終末期がん医療におけるスピリチュアルの理解に繋がる一助となれば良いとの思いから発表をさせて頂きました。

そしてシンポジウムにおいて他の先生方の切り口の異なる話題提供を聞くことで、各領域の研究が着実に進展していることを実感したことは当然のことながら、以下のような思いを強く抱きました。「宗教性」あるいは「スピリチュアル」は多種多様な事柄を含むものであるということだけでなく、各領域において「宗教性」あるいは「スピリチュアリティ」という言葉が意味するものをどのように定義し捉えるかによって、いかなる内容をいかなる手法で、いかように呈示するのか極めて異なるということです。

私の発表では、スピリチュアルペインを全人的苦痛の概念、村田先生の理論から理解すること

で、患者の苦痛はケアの対象としてアセスメント・具現化され、その痛みは患者本人や医療者に認識されることが可能になるとの考えをベースに話題提供をしました。一方で宗教性、スピリチュアルペインは、重篤な病気という文脈においてのみ出現するのではなく、他の先生が発表されたように、日常性が保たれている状況化での「無意識の世界」、あるいは「加齢に伴う自身や他者の老いや死の自覚」の中で語られる対象であることも理解できました。あるいはその日常性の連続性の中にこそ、終末期におけるスピリチュアルな領域やペインがあるのではないかとも意識しました。

他方、今回のシンポジウムでは「宗教性」と「スピリチュアリティ」という言葉が意味するものに関して両者の定義を見ると、その2つの概念は、片方がもう片方を包含するというよりも、両者が重なる側面と独立した側面の両方を持ち合わせた概念であることも十分に理解できました。ただし、果たしてその2つの概念をひとまとめにしないまでも、上位概念としてそれらの説明する言葉は成立するのか、また個人の中の「宗教性」と「スピリチュアリティ」の統合というものをどのように実証的に捉えることができるのだろうかという疑問も浮かびました。私は発表の中で、多死社会を迎える我が国における高齢者医療のパラダイスシフトの課題として、在宅医療やケアにおけるスピリチュアルケアの課題を述べましたが、患者あるいは家族としての「宗教性」と「スピリチュアリティ」の統合について、今後より一層、医療や看護、介護といった枠を超えた臨床の「場」に即した議論が必要なのではないかと感じました。

公募シンポジウム(宗教心理学研究の展開 14)に参加して —実証的宗教心理学研究に期待すること—

末田啓二(神戸親和女子大学)

私が宗教心理学研究会のシンポジスト(指定討論)として参加したのは、今回のシンポジウムが初めてです。これまで宗教心理学研究会ではこのニュースレターをはじめ、多くの著書、学会発表などを通じて我が国における宗教心理学の現状と視座、位置づけ、研究の意義、方法論など、新しい研究分野の出発点で求められる理論や基礎的研究が展開されてきました。それらを背景にして、特定の宗教、宗派に関わる調査研究や事例研究、また臨床現場における緩和ケアやターミナルケアと死の問題など、スピリチュアリティに関する事例や調査研究、さらには心理臨床や社会福祉領域とのコラボレーションが必要な学際的研究など、多彩な研究へと広がっていきました。特に松島編(2015)による科研研究「宗教性/スピリチュアリティと精神的健康の関連」や、松島・川島・西脇編著(2016)の「宗教を心理学する」、などはわが国における実証的宗教心理学の黎明期を告げるにふさわしい著作と言えるでしょう。

私が宗教心理学研究会に関わって6、7年になります。その間研究会とはつかず離れずの関係を保っていたために、会員の方々の旺盛な研究活動にはついていけず、加えてこれまでの宗教心理学関連の文献にも疎く、自分自身のテーマである高齢者研究ばかりに専念しておりました。したがって今回のシンポジウムでの指定討論は、門外漢の視点からの論評や問題提起になっていたかと思います。宗教心理学プロパーの研究者から見ると、的外れのそしりは免れません。しかし日本独自の宗教心理学を意欲的に構築しようとしているのを間近に見るにつけて、発展への期待を込めてエールを送る気持ちから指定討論をお引き受けし、私見として勝手なことを述べさせていただいた次第です。

私の実証的宗教心理学研究に期待する方法論については、今回のシンポジウムの指定討論や、第12回関西地区勉強会報告(2017.3.18)で

述べましたように、実証性、一般化を重視するなら、多くの人々が共通して経験する具体的な心理現象を日常生活の中から抽出し、その心理現象の背景にある心情や心性を宗教性として理解していくのが肝要ではないか、初めに宗教もしくは宗教性があるのではなく、人間が普遍的に持っている感性や心情などの中に、いわゆる宗教性のコアや原点と呼べるもののが見出されるのではないか、とこのように考えています。

松島(2016)は我が国の実証的宗教心理学研究の難しさの理由の1つとして、日本の宗教的風土の複雑さを指摘されていますが、この複雑さこそ日本での宗教心理学研究にとってはきわめて恵まれた環境ではないかと逆に思うのです。すなわち日本人の持つ宗教に対する「節操のなさ」を逆手に取れば、宗教に縛られない宗教性の心理学研究の可能性は大きく広がるものだと思います。パラドックスに聞こえるでしょうが、我が国の宗教心理学は宗教にとらわれない宗教心理学を特徴とすることができるのではないかでしょうか。ダライ・ラマ(1997)は教育を実践する上で、宗教教育よりも本質的な人間の価値を扱う「世俗的倫理」による教育の必要性を強調しています。すなわち暖かい心、他者をいたわる心、慈悲、共感など、個別の信仰を超えてすべての人間に普遍的に重要な徳性を挙げています。これらの特性はどの宗教でも強調されていることから、教育実践にわざわざ宗教を持ち出す必要はないということになります。このようにいったん宗教を横に置いてみると、仏教やキリスト教など既存の宗教が出現する以前においても、現代人と類似した感情や心性がみられたのではないかでしょうか。例えば人との出会いなど、多くは偶然によって生起するにもかかわらず、そこに必然性を見出したり、また宇宙や生命現象など人智では計り知れない不可思議な現象や存在に対して、人間の力をはるかに超えた絶対的な存在として感じることは、現代

人の私たちもしばし体験します。その不可思議さや絶対的存在を聖なるものとして畏敬の念を抱くのは、有史以前から続く人間共通の感情であって、これらが宗教性のコアになる心性であり宗教性の起源となるものと言えるでしょう。仏教やキリスト教、神道などは歴史的発展の過程でさらに分化し、それぞれ固有の教義・經典や組織、システムが形成されてきました。これらの源流をたどると人間の共通した心理特性が見えてくるのではないか、どの宗教も人間の共通した心理特性に基づいて発展し、現代に至っていると思われます。いわゆる宗教と呼ばれるものが全く見られないような民族や地域は、この地球上には存在しないのではないか、宗教弾圧によっても消滅しない歴史を見てもそのことが裏付けられるのではないかでしょうか。

このような理由から、次のようなテーマを我が国の実証的宗教心理学研究で取り上げてほしいと思います。広く多くの人々が経験する自然の感情や行動、日常生活の中に見られる習慣的行動、例えばおまじない、呪文、お守り、祈願(合格や戦勝など)、迷信や伝承などは、人間の宗教的

心情、心性を紐解く手がかりとなります。そして心理学の概念(共感性、感情移入、愛着、適応機制など)を適用しながら、情緒(感情)や認知、学習(行動)、人格、発達など、心理学の各領域で体系づけられた理論を援用し、縦糸・横糸の組み合わせによって研究テーマをさらに広げることが期待できます。

最後になりましたが、会員の皆様には夢を語り合ってほしいと思います。宗教的対立が地球的規模で深まっている今日、何のために宗教心理学に携わり、宗教心理学の発展を目指そうとするのか。理想論もいい、夢もいい、何か共通の目標を作り上げてほしいと思います。ちなみに私自身の夢は宗教心理学の発展が宗教の本来の姿を明示し、類似性・共通性を確認する中で、宗教・宗教性を人間性の本質の中核部分に位置付けることです。このことによって宗教的対立は減少するのではないかと考えるからです。

以上、シンポジウムに参加したことをきっかけに、私なりの雑感を徒然なるままにしたためました。どうかご放念ください。皆様のご活躍をお祈りします。

宗教心理学的研究の展開(14)に参加して

木村真利子(立正大学大学院:非会員)

2017年9月、久留米で開催された日本心理学会第81回大会でのシンポジウムに参加させて頂きました。はじめての参加でしたが、今年で14回目になるとのことで、これほど長く続けてこられた研究会のみなさまにはただただ頭が下がる思いです。今回は開催地が久留米と遠方だったこともあって、直前まで参加を迷っておりました。取りあえず行っておこうという軽い気持ちで参加しましたが、結果的には大変楽しい遠征となりました。なにより宗教心理学についてたっぷりと発表を聞く機会は、心理学の学会ではなかなかないかと思います。たいていの場合は、宗教に関する数少ない発表を目を皿のようにして探すしかないので、共通の関心をもつ方が何人も集ま

っていることの嬉しさを今回はじめて学会で感じることができました。

シンポジウムの副題は「超高齢社会における宗教性／スピリチュアリティ」ということで、宗教と関わる大変大きく重要なテーマである「死」とそれに直面する高齢者を巡る多角的な議論を聞かせて頂きました。どれも大変興味深く、また勉強になりました。

はじめにお話しくださった大橋先生からは、研究の上でまず抑えなければならない、研究の現状について大変貴重な資料とともに聞かせて頂きました。膨大な文献検索作業をされた資料を頂いたことは大変ありがたいことだと思います。つづいての河村先生と中里先生は、それぞれ高齢

者施設と終末期がん患者をめぐるスピリチュアルケア、宗教的ケアについてご報告されました。お二人の現場に根差したお話を聞きながら、死を目前にした人々に対して宗教やスピリチュアリティにしか担えないケアが確かにあることを感じさせられました。改めて、宗教は我々の心に対して何をしてきたのか、何をなしうるのかについて考えさせられます。より多くの心理学者がこの問いに向き合って、研究が重ねられていくことを願うばかりです。心理学系の学会を見わたしてみると、やはりまだ日本の心理学(日本全体かもしれません)においては宗教の役割、影響力が過小評価されているように感じます。宗教やスピリチュアリティに対するイメージや偏見のようなものもあるのかもしれません、非科学的だと言って反射的に避けて科学の対象としないことは非常に勿体ないことだなと思います。大橋先生のご報告を聞いてもよくわかりますが、宗教という大きな対象の中の高齢者との関わりという一側面だけでも、まだまだ心理学が扱うべきテーマは尽きません。末田先生による指定討論も宗教心理学に

対する前向きなお言葉で大変あたたかく、励された参加者も多かったことと思いますが、私自身も、やるべきことが沢山あるのだと奮い立たされる思いでした。

最後に 1 つ印象的だったのが、川島先生が仰っていた、居場所や社会的繋がりを提供するという宗教の役割への期待でした。現在私が研究対象としている破壊的カルトの問題でも、人生の意味などの実存的な問い合わせる場のなさが根本にあるような気がしています。こういった人々を包摂できるような居場所として宗教が果たす役割は、非常に貴重なものではないかと思います。

今回のシンポジウムは宗教について改めてじっくり考えることのできる有意義な時間となり、多くのことを学ばせて頂きました。シンポジウム終了後の懇親会でも、おいしい焼き鳥を片手に先生方と様々なお話をさせて頂いて、よい刺激をたくさん頂きました。シンポジウムを準備された先生方には心より感謝を申し上げます。来年のシンポジウムも楽しみにしております。

「死の顕現性」がつなぐ高齢者研究と被害者研究

白岩祐子(東京大学:非会員)

本シンポジウムはすでに 14 回目を数えるとのことで、今やあらゆる分野・領域で検討される「高齢化社会」がテーマに掲げられることも時間の問題であったというべきでしょう。全体として印象的であったのは、他分野・領域では「高齢化社会=対処されるべきネガティブな事態」という前提が所与となりがちであるのに対し、本シンポジウムに登壇された各先生のお話からは、そうした対処・克服軸ではなく、受容のまなざしが感じられたことでした。「あるがまま」の視点を通して低音とした各ご報告を伺いながら、こうした高齢者研究と私自身の研究は「つながっている」という不思議な感覚を得るに至りました。我田引水となり恐縮ではありますが、以下、その内容をご報告させていただきます。

私はふだん、犯罪や事故・災害に遭遇した被害者、とくに遺族のニーズやその応答としての被害者法制を研究テーマとしています(専門は社会心理学・被害者学です)。心理学研究はあらゆる文化・集団の人々を対象とする学問ですが、その中で被害者という存在は断絶性が高く、他の研究を見聞きしていく「つながっている」といった感覚を抱くことは、まずありません。今回、高齢者と宗教性／スピリチュアリティについてのお話を聞きする中ではじめて、「通底している」という感覚を得たわけです。被害者、とりわけ大切な家族を突然に失った遺族という存在は、「死といつも隣り合わせの人」「死と共に生きている人」と定義することができます。人生の諸段階においてもっとも「死」に近く、人生の終焉といいやがおうでも向き

合わざるを得ない高齢者と、事故・事件・災害の遺族とを近い存在だと仮定することは、それほどどの暴論とも思われません。

このような視点から振りかえってみれば、遺族とスピリチュアリティについてのエピソードは、実は枚挙にいとまがないことに気づきます。「せめてわが子の遺影を刑事裁判の傍聴席に持ち込みたい」と願ったものの裁判所から許可されず、かわりに遺骨を胸元にしのばせて裁判に臨んだ遺族。子どもの骨壺を「あんな暗い場所には置いておけない」と、家族の反対を押し切って自宅に置いたり、いつも身に付けていたりする遺族。子どもの遺骨を食べたことがあるご遺族も少なくありません。再発防止を故人の遺志として社会に働きかけている遺族の中には、霊体験としか言いうようない故人との交流を口にする方も珍しくありません。日航機墜落事故や東日本大震災など、一度に多数の死者をもたらした事故・災害では、死者との交信もまた数多く報告され、そうした経験をまとめたルポタージュも刊行されています(奥野, 2017¹⁾)。

宗教教団によっては、これらは宗教とはおよそ縁遠い現象・行為なのかもしれません。しかし、こうした現象を受けとめ行為を意味づける上で、宗教的な心性が関与していることはほとんど間違いないように思われます。このような心的営みや経験を通して「死者は自分のすぐそばにいる」と感じることにより、一度は生きる意味を失った遺族が、再び生きていく力を得ていることもまた紛れもない事実です。遺族が死者との物語を再び紡いでいくことを助けているのは、「宗教性」としか呼びようのないものではないでしょうか。ただし、この宗教性が意味しているのは、具体的な宗教教義とか活動といったものではなく、人(さしあたって日本人としておきます)がごく深いところに内在化している死者観・仏観・魂観というべきものです。このような広義の宗教性は、特定の信仰をもたない多くの日本人の内に存在し、老年期や大切な人の死に際して顕現化するものと考えら

れます。

このような観点から改めて各報告を振りかえると、大橋先生が今後の展望として、具体的な宗教意識の細部に目を向ける、宗教性に対する新しい理解の枠組みを構築する、という課題を挙げておられたのはきわめて示唆的であると思われました。その意味で、末田先生がご指摘になった「靈、心、魂などの概念整理」が、なお課題として行く手に横たわっていることは間違ひありません。河村先生が挙げられた「人生の意味への問い」は、上記した私の感想をきちんと総括してくださいました。スピリチュアルペインに対して宗教性がもつ意味は「間違いなくある」というのが私の実感ですが、ここでもやはり、核になっているのはより広義の、より素朴な宗教性ではないのか、という印象をもちました。中里先生が定義をお示しになったスピリチュアルペイン、「自己の存在と意味の消滅から生じる苦痛」は、老齢の遺族(世代をつないでいくはずだった子どもや孫を失った人々)において増すものと理解されます。死の受容にみられるアンビバレンスに着目された川島先生のご報告については、これと存在脅威管理理論とをどう整合させることができるか、という理論拡張の可能性に興味を引かれました。同時に、遺族の多くが、「はやく子どもに会いたい」と死を恐れない一方で、故人の遺志を実現しないうちは胸を張って会えない、と考えていることから、このモデルは遺族にも適用可能、というよりも遺族こそアンビバレンスそのものではないのか、といった印象を得ました。

最後になりますが、長年にわたり本シンポジウムを企画・実行してこられた松島先生のご尽力に敬意と感謝の意をお伝えしたいと思います。今後、周辺域としての宗教性(つまり、魂とか霊とか仏とか、もっと素朴なかたちで人々の中に存在している宗教らしきもの)もぜひ取り上げていただきたいと願っております。

¹⁾ 奥野修司 (2017). 魂でもいいから、そばにいて : 3・11 後の霊体験を聞く 新潮社

高齢者の宗教性・スピリチュアリティ研究への期待

辻本 耐(長栄学園木島幼稚園)

個人的には、久しぶりに日本心理学会での宗教心理学研究会主催のシンポジウムに参加させていただいた。会場に足を運んでみれば、心理学の学術大会にもかかわらず、相変わらずの盛況ぶりであり、あらためて、宗教心理学に対する関心の高さを伺うことができた。

この度のシンポジウムは、「超高齢社会における宗教性・スピリチュアリティ」という大変興味深いテーマであった。高齢者の適応という観点からみても、例えば、Eriksonの発達段階理論における老年的超越、もしくは、Tornstamが提唱した老年的超越の特性において、宗教性・スピリチュアリティは重要な要因として捉えられている。平均寿命の伸長が続いている日本において、本シンポジウムのテーマは今後ますます重要なものになるであろう。

その一方で、わが国における高齢者の宗教性・スピリチュアリティに関する基礎研究は、まだまだ不足しているように感じられる。シンポジウムでは、既成宗教を対象とした研究に加えて、日常生活における宗教性にも注目してはどうかというお話をもっていたように思う。しかし、特定の宗教における信仰や信心の問題でさえ、わが国では十分に議論されていないのが現状である。

例えば、親鸞を開祖とした浄土教の一派である浄土真宗には、「妙好人(みょうこうにん)」という在家の篤信者が存在していた。有名・無名を含めて、数多くの妙好人が存在していたといわれており、例えば、讃岐の庄松、六連島のお輕、因幡の源左、石見の才市といった人物などが有名である。その記録は、江戸時代に編集された『妙好人伝』などに認められるが、鈴木大拙などの知識

人に紹介されたことで、世間の耳目を集めるようになった。妙好人の多くは社会的地位が低く、読み書きにも困るような状態であったといわれている。そういった恵まれない環境にありながらも、妙好人の中には、まるで悟りを得たかのような達観した境地に達していた者のもいたのである。

彼らを篤信者へと成長させたのは、「聴聞(ちようもん)」という宗教行動である。聴聞とは、もともと釈迦の教法を聞くことを意味したものであり、浄土真宗の寺院で催される法話会(説法会)に出向くなどして、僧侶から教義に関する話を聞くことである。浄土真宗では、「生涯聞法」、「死ぬまでお聞かせにあずかる」と表現されており、実践的な側面において極めて重要なものとされている。

もちろん、聴聞していれば誰もが妙好人のようなになるのかといえば、そんな簡単な話ではないだろう。しかし、希有な事例とはいえ、ただ「聴く」というシンプルな宗教行動を継続した結果、高齢期において宗教的想像ともいえる人格を獲得していた人物が実在していたことも事実である。

残念ながら、宗教が世俗化した現代社会において、このような人物はもう出現しないであろうといわれている。それでも、全国には約2万の真宗寺院があり、今日もどこかのお寺で聴聞の場が設けられている。現代に生きる高齢の門信徒(浄土真宗の信者を指した語)が、聴聞を通して、どのような宗教性を醸成してきたかなど、宗教心理学的興味・関心は尽きない。既成宗教における高齢者の宗教性・スピリチュアリティに関する研究はまだまだ途上段階である。本研究会の今後の活動に期待したい。

日心シンポジウム参加記

—「生(←)老病死」の宗教性／スピリチュアリティ研究—

村上祐介(プール学院大学:非会員)

2017年9月21日、日本心理学会第81回大会(於:久留米シティプラザ)にて、公募シンポジウム「宗教心理学的研究の展開(14)—超高齢社会における宗教性／スピリチュアリティー」が開催されました。私の専門領域が、「教育におけるスピリチュアリティ」ということもあり、数年前からこちらのシンポジウムに参加させて頂いております。そうした縁もあって、この度、松島先生からシンポジウムへの感想(コメント)依頼を頂戴しました。以下、先生方のご発表を拝聴し、感じたこと・考えたことを簡潔にまとめていきたいと思います。

(1)大橋先生「日本における老年学、医療、看護、介護領域でのスピリチュアリティ研究の状況と今後の展望」:

老年・高齢者対象の宗教性／スピリチュアリティ(以下、R/Sと表記)研究の論文数・学会発表数を丁寧に整理され(特に、"宗教性を匂わす"膨大な用語を条件に加えた研究サーチの作業は圧巻でした…), 研究「量」が一定水準で維持されていること、スピリチュアリティを扱う介入研究のほか、多様な変数との関連性が明らかにされていることが確認されました。

そのうえで教えて頂きたく感じたのは、こうした研究の「質」はどうなのか、また、海外の高齢者スピリチュアリティ研究の動向との相違点はあるのか、ということです。たとえば前者であれば、研究デザイン、分析手法、研究知見を位置付ける理論的枠組み等の水準を丁寧に観ていくことによって、R/S研究を一步前進させるヒントを得ることができるかもしれません。後者であれば、R/Sは文化的要因と不可分な関係にあると思いますので、日本特有のトピックが存在するのか(世代という横断的観点から考えると、伝統的スピリチュアリティの継承と喪失とも関連し、重要な問題だと思います)、また、ある程度、通文化的に効用が認められそうな介入方法があるのか、と

といったことに関心を抱きました。

(2)河村先生「高齢者施設における利用者のスピリチュアルケア・宗教的な関わりの現状と課題」:

高齢者施設における宗教的／スピリチュアルケアに焦点を当て、宗教法人が経営母体である／経営母体でない両施設の職員にインタビューを行い、対応上の工夫や課題、利用者の様子について多様な語りが得られました。

の中でも、興味深く感じたことは、対応の工夫として「職員個人の宗教・信仰の不明示」、課題として職員の「宗教的知識・宗教観の浅薄さ」や「意義の無理解」、職員自身・利用者への意識の変化として「宗教への興味、重要性を認識」、「利用者の宗教への思いを認識」といったカテゴリーが得られたことです。これらはいずれも、職員自身のR/Sや、R/Sが人間にとってどのような機能を有するかに対する意味づけの現れだと解釈できるように思います。個人的には、R/Sケアの提供者に求められる要素の一つに、提供者自身のR/Sの深化が挙げられるのではないかと思っていますが、施設での利用者やその家族、宗教家との関わりを通して、職員さんのR/Sがダイナミックかつ継続的にどのように変化していくのか、関心を持ちました。

(3)中里先生「終末期がん患者の『スピリチュアルペインのアセスメントとケア』の現状と課題」:

ターミナルケアにおけるスピリチュアルペインの定義とそのアセスメント方法(Spiritual pain assessment sheet: SpiPas)、スピリチュアルペインに焦点をあてた介入方法(ディグニティセラピー、短期回想法)が概観され、それぞれの研究・実践上の課題と展望が指摘されました。理論研究(概念整理)の知見に依拠し、測定の対象を明確にしたうえで、実施可能性の高いアセスメント・ツールが着実に作成されている状況や、これに

応じた介入・効果測定も展開されている様子を知ることができ、発展途上である教育領域に身を置く研究／実践者として、刺激を受けました。

一方で、ディグニティセラピーの拒否率が 86%と非常に高い値を示したように、対象者の特性に応じた、多様なスピリチュアルケアのあり方が開発されていくことが、今後の展望の一つであるように感じました。本発表で紹介された介入技法は、人生の意味や自己の存在についてのナラティブを、言語ベースで構築することに重きが置かれていますが、そもそも、こうした問題について内省的に言語化するという作業への抵抗の少なさに、個人差・文化差が存在するように思います。中里先生も、「今後の展望」として「介入法の機序・効果、適用が困難な背景要因の検討」を挙げておられるように、人が人生の意味を生成するメカニズムに関する基礎研究の知見(レビューとして村上, 2016)ともタイアップしながら、個々のスピリチュアリティの発展に寄与し得る、効果的で多様な臨床の技法が創出されることが期待されます。

(4)川島先生「高齢期における死と宗教」:

川島先生のご発表では、質的な研究で得られた語りを中心に、高齢者の死や生に対する意味づけ、また、高齢者介護に関する家族等への負担感やそれに伴う自死の問題などがとりあげられ、最後に、これから宗教に期待することが提言されました。

個人的に大変興味深く感じたのは、宗教に期待することとして、「再びつなぐ(re-ligare)」という機能が明示された点です。ご発表の中で、家族による介護への負担感を懸念する高齢者がいることや、終活ブームの存在が指摘されました。こうした現象は、「死とは何か?」という「問い合わせ」に対する「答え」が脱構築された(また、そうした「答え」を共有していた家族・地域システムが解体された)現代において、死が、コストのかかる忌み嫌われるものとして矮小化され、個人主義的な風潮のもとで自己決定するものとみなされている様子を現しているのではないでしょうか。こうした状況

にあって、土着の宗教には、「死とは何か?」という「問い合わせ」を中心に据え、高齢者、介護者である家族や地域コミュニティを結びつけ、「答え」を生成する際の物語を提示する役割が、より一層期待されているのだと思います。

おわりに:

昨今の科学技術の急速な発展に伴い、人間が有限の生命や身体をもつこと、そして、老いることや死んでゆくことの意味が、徐々に変化しているのではないかと感じます(例えば、池上・石黒, 2016; Seung, 2012 青木訳 2015)。こうした潮流の中、日本社会が少子高齢化を迎えるにあたって、誰しもに関連する死や生の問題を扱う R/S 研究は、より一層その存在意義を高めていく(問われていく?)ように思います。なぜなら、本シンポジウムでの先生方のご発表でもその一端を確認することができたように、R/S は、老い、病み、死を迎えるプロセスを通して、当人やその周囲の人間が、時に痛みを抱えながら、生きるという行為(死を前提として生まれ来ること)への意味づけを潜在的・顕在的に再構成することに関わっているからです(「生(一)老病死」)。公開シンポジウムに参加し、高齢者や病床に伏せておられる方々の R/S 研究の展開について勉強させて頂きながら、そのようなことを考えました。

末筆ながら、この研究領域がますます発展し、市井の人々の幸せに寄与できますよう、心からお祈り申し上げます。

引用文献:

- 池上 高志・石黒 浩 (2016). 人間と機械のあいだ-心はどこにあるのか- 講談社
- 村上 祐介 (2016). スピリチュアリティ教育への科学的アプローチ-大きな問い合わせ・コンパッション・超越性- ratik
- Seung, S. (2012). Connectome. Levine Greenberg Agency. (スン, S. 青木 薫 (訳) (2015). コネクトーム 草思社)

事務局からのお知らせ

宗教心理学研究会ニュースレター第27号が発行されました。今回の内容は、日本心理学会第81回大会公募シンポジウムの報告および発表者・参加者からの感想となっております。今号も非常に充実した内容となっております。ニュースレターを通して、この先さらにクローズアップされるだろう「超高齢社会における宗教性／スピリチュアリティ」を考える機会となれば幸いです。

ニュースレターを始め、これからも研究会に対する会員の皆さまからのご意見、ご感想をお待ちしております。(K.M)

[宗教心理学研究会の今後の予定]

2018年9月25日(火)～27日(木)

日本心理学会第82回大会公募シンポジウム(第15回研究発表会)開催

会場：仙台国際センター

発行：宗教心理学研究会

編集：宗教心理学研究会事務局

研究会事務局

担当：松島公望 [psychology-religion@office.so-net.ne.jp]

研究会ホームページ管理・運営

担当：クリーク波奈 [psych.religion.web@gmail.com]

研究会ホームページ

http://www.geocities.jp/psychology_of_religion_japan/